

新聞のテキストに見られる 「ようだ」「らしい」のテンス交替

小野澤佳恵

〔キーワード〕 書き手、体験者、関係者、発話時、テンス

〔要旨〕

現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形と新聞のテキストとの関係については不明な点が多い。

ここでは、新聞のテキストを下位区分し、「ようだった」「らしかった」の意味の特徴を見ながら、それらが各新聞のテキストに現れる際の、発話主体と発話時の基準軸とに注目しつつ考察することによって、テンス交替のあり様がテキストごとに異なることを明らかにし、次のように結論付ける。

過去の出来事を自ら体験した発話主体にとっての発話時「現在」が基準軸となり、その現在かそれより未来か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じるテキストの場合、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができない。一方、書き手である発話主体が、虚構の物語の特定の作中人物のようになる場合がある。そのとき、過去の「出来事時」が発話時の基準軸となる。絶対的な時間的位置付けが生じないこのようなテキストの場合、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができる。

1. はじめに

現代日本語の認識的モダリティにかかわる「ようだ」「らしい」の過去形について、テンス交替という観点からあり様を探り、それが会話のテキスト（小説の会話文）と小説のテキスト（小説の地の文）とで異なること、さらに、それには発話主体と発話時の基準軸とが大きく関係していることを小野澤（2008）で明らかにした。しかし、現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形は、新聞のテキストにも現れる。にもかかわらず、新聞のテキストと「ようだ」「らしい」の過去形との関係については、不明な点が多い。

新聞記事と「ようだ」「らしい」との関係について、菊地（2000）では、「信頼性を要する学術論文や新聞記事でヨウダが使われやすくラシイが使われにくい」理由を両語の意味特徴から指摘しているが、実際の用例からその理由を明らかにされておらず、また、両語の過去形でも非過去形と同じ特徴が見られるのかは明らかではない。

工藤（1995）では、会話のテキストの場合とも小説のテキストの場合とも「違ったかたちで、テンス形式が使用される」テキストとして、「実用的、つまりは、事実的文章」である「ノン

フィクションのテキスト」を挙げ、そこでの過去形と非過去形の交替現象について論じている。しかし、工藤 (1995) では、「ノンフィクションのテキスト」に現れるモダリティの過去形と非過去形の交替については言及されておらず、また、新聞のテキストも同じ枠組みで説明がつくのかどうかについても言及がない。

そこでここでは、小野澤 (2008) での考察を踏まえ、新聞のテキストに現れる現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」の過去形について、テンス交替という観点からあり様を探るとともに、「ようだ」「らしい」の過去形とそれが現れる新聞のテキストとの関係や特徴を明らかにしたい。考察のための資料として、文末の位置にある「ようだった」「らしかった」が実際に観察できる新聞のテキストを取り上げる。そして、小野澤 (2008) での枠組みを用いて意味の特徴を見ながら、新聞のテキストに「ようだった」「らしかった」が現れる際の、発話主体と発話時の基準軸とに注目しつつ考察することによって、テンス交替のあり様を明らかにする。

2. 「ようだ」「らしい」の意味分類

小野澤 (2008) で提示した枠組みをもとに、新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」それぞれの意味の特徴についても見ていく⁽¹⁾。次に、小野澤 (2008) から、「ようだ」「らしい」の意味用法と用例、そして形式の分布についてまとめた表を次に挙げる。表中の「○」はその意味用法を持つこと、「×」は持たないことを示す。

表1 「ようだ」「らしい」の意味用法の分類

意 味 用 法	用 例	ようだ	らしい
I 知覚で捉えた様子を非現実的に描写する。	例(1) 太郎の発言は、まるで自分には何も責任がないか <u>のようだ</u> 。	○	×
II 知覚で捉えた様子を表す。 A 知覚で捉えた様子そのものを描写する。 B 知覚で捉えたことに基づいて判断した様子を述べる。	Aの例(2) 二年ぶりに父と会った。見ると短めの髪には白髪が交じり、顔には皺が増えた <u>ようだ</u> 。 Bの例(3) 今まで繰り返し説明してきたのに、この人は <u>どうやら</u> 、何をすべきか全然分かっていない <u>ようだ</u> 。	○	×
III 知覚で捉えた状況を証拠として推測を加えた結果、そうと判断される別の事態の成立を述べる。	例(4) 山田先生が研究室の鍵を掛けていらっ <u>しやる</u> 。 <u>どうやら</u> 先生は授業に行かれる <u>らしい/ようだ</u> 。	○	○
IV 伝聞情報や判断結果に基づいて、未知の事柄を推測する。	例(5) <u>新聞によると</u> 、出生率が過去最低を記録した <u>らしい</u> 。	×	○

3. 新聞のテキストについて

ここでは、終止の位置にある「ようだった」「らしかった」が実際に観察できる新聞のテキストを次のように二つに下位区分する⁽²⁾。

新聞Ⅰのテキスト：書き手の直接体験した過去の事実を提示する文章。

具体的な新聞Ⅰのテキスト

- ・体験報告（書き手自身が直接見聞きし、体験したことを報告する。）
- ・随筆（書き手自身が過去に体験した旅行や身近な出来事を通しての意見や感想を述べる。）

新聞Ⅱのテキスト：書き手の非体験的な過去の歴史的事実を提示する文章。

具体的な新聞Ⅱのテキスト

- ・事件や人物についての記事（過去の事件やある人物に起こった出来事について、本人あるいは関係者の証言、また、資料や記録をもとに構成される。）

次に、ここで調査資料とした、朝日新聞オンライン記事データベース『聞蔵（きくぞう）』の、2002年から2006年までの5年分の記事から「ようだった」「らしかった」を分析したところ、他のテキストには「ようだった」「らしかった」とも見られたのだが、新聞Ⅰのテキストである体験報告のテキストにだけ、「らしかった」が1例も見られなかった。

また、その他のテキストには「らしかった」が見られたが、「ようだった」の出現数に比べて圧倒的に少なかった。実際に、認識的モダリティの「ようだ」「らしい」の過去形について、調査資料『聞蔵』で、2006年1年間での使用数を見たところ、「ようだった」は約1,700件、「らしかった」は約10件というように、使用に大きな違いが見られた。

これらは次の理由によるのではないかと考える。新聞のテキストでは、その記事の信頼性を要し、事実に基づいて述べる必要があるとされる。そのため、新聞のテキストの書き手自身が知覚で捉えた様子を表すことができる「ようだった」は用いられやすく、事実かどうかは明確ではなくなる推測の意味用法を持つ「らしかった」の使用は非常に限られるのだろう。

「ようだった」「らしかった」の新聞のテキストにおける使用数の違いについては、以上の指摘に止め、次から、新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」について分析を行いたい。

4. 新聞Ⅰのテキストにおける「ようだった」「らしかった」

それでは、書き手の直接体験した過去の事実を提示する新聞Ⅰのテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様について見たい。分析にあたり、ここでは、3. で示した新聞Ⅰの具体的なテキストである、体験報告と随筆と、それぞれのテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様を見ていく。

4.1 体験報告

まず、体験報告のテキストにおける「ようだった」のあり様を見る。

- (6) 2006年11月30日 夕刊 芸能 (ステージ) ザ・バースディ 広がる表現、尽きぬ興味

03年のミッシェル・ガン・エレファント (以下TMGE) 解散後、ロツソを経てチバユウスケが立ち上げた新バンド、バースディのツアー初日を見た (15日、東京・渋谷AX)。

TMGE以来3年ぶりに組んだクハラカズユキ (ドラムス)、ロツソからの相棒であるイマイアキノブ (ギター)、それに新人ヒライハルキ (ベース) がチバのバックにそろると、まずはどっしりしたセッション風のインストで、息の合ったところを見せつけた。

初日らしい高揚感と気合をみなぎらせた演奏は、このバンドでチバがやりたいのは、腰の据わったロックなのだという①宣言のようでもあった {①*宣言のようでもある}。硬派なガレージロックであったTMGE、ポップな曲もものにしたロツソの経験を生かしつつ、今は更に広い表現の場としてのバンドを目指しているのだろう。

10月に出た初作「Rollers Romantics」は、そんな意欲を伝えるものだったが、ライブではバンドの一体感と迫力がダイレクトに伝わってきた。「stupid」など勢いのある曲では、迫力のあるダミ声で歌うチバが、イマイとギターを合わせながら、曲を引っ張っていく。歌に合わせブレイクする緊張感あふれる曲や、ブルースやジャズを取り込んだ複雑な構成のものなど、未発表曲を惜しげもなく演奏したのも、そんな自信の表れだったか。スタジオには収まりきれなかった演奏が、ステージで②爆発しているようだった {②*爆発しているようだ}。

一方、「春雷」のようにシンプルな演奏がチバの歌を引き立てる曲では、シンガーとしての彼に焦点を当てるとともに、歌あつての曲を彼が書いていることも、再確認させた。それもまた、今は初期衝動の再現だけでなく、新たな自己発見の情熱で動いていることの表れでもあろう。最後に歌った「Sheryl」も、程よく力の抜けた歌が新境地をうかがわせた。

ライブならではの豪快さも生かしながら、このバンドがツアーを経て、存在感を増していくのは明白だ。そこでチバが、どのように表現を広げていくか。興味は尽きない。

(今井智子・音楽評論家)

(6)では、書き手の現実の記事執筆時現在を基準軸として、それより過去の「2006年11月15日」に行われたバンドのツアーを書き手が実際に見て、聴いた、その体験を「2006年11月30日」の記事として報告している。(6)の各文終止の位置に示した二重線部「ツアー初日を見た」「見せつけた」「再確認させた」「うかがわせた」が、書き手の記事執筆時現在を基準軸として、それより過去のバンドのツアー初日の出来事を表す過去形である。また、(6)の点線部「曲を引っ張っていく」は、過去の出来事であるバンドのツアー時を基準とした相対的テンスであり、出来事の現在性を表す。そして、(6)の波線部「目指しているのだろう」「自信の表れだったか」「表れでもあろう」「明白だ」「表現を広げていか」「尽きない」は、書き手の記事執筆時現在を基準軸とした、書き手の現在の心的態度であり、それを非過去形が表している。

では、(6)の①「宣言のようでもあった」と②「爆発しているようだった」の「ようだった」はどのようなあり様を示しているのだろうか。

2. の表1のIの意味を持つ、これら①と②の「ようだった」は、(6)の①'と②'のように非過去形「ようだ」に置き換えられない。それは、これら①と②の「ようだった」は、書き手の記事執筆時の現在を基準軸とし、それより過去の出来事であるバンドのツアー初日時に、書き手が知覚で捉えたバンドの演奏を「宣言」や「爆発している」様子として非現実的に描写しているからである。つまりこれら①と②の「ようだった」は過去のテンス的意味を持っていると言えよう。もし、これら①と②の「ようだった」を①'と②'のように非過去形「ようだ」に置き換えると、書き手の記事執筆時の現在の時点に、書き手がバンドのツアー初日を見て、聴いて、知覚で捉えたその様子を表す意味を持ってしまう。

このように、新聞Iのテキストである体験報告のテキストにおいて、過去形「ようだった」は、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として過去のテンス的意味を持ち、非過去形「ようだ」の非過去のテンス的意味と、絶対的テンスとして対立する。

また、3. でも指摘したが、体験報告のテキストには「らしかった」が現れなかった。それは、3. で述べた信頼性を要求される新聞のテキストの性格によるだけでなく、次の点があるからだろう。2. の表1で示したように、「らしい」の形式だけが持つ意味用法は、推測するということである。推測をするということは、基本的に、書き手の記事執筆時の現在において未知の事柄を推し測ることである。そのため、書き手の記事執筆時の現在を基準軸とする体験報告のテキストでは、非過去の意味を持つ「らしい」が使用されると考えられる。非過去の「らしい」の使用によって、書き手の記事執筆時の現在において、伝聞情報や判断結果に基づいて行なわれた、書き手自身にとって未知の事柄の推測であることが表されるのである。一方、過去の意味を持つ「らしかった」は、過去形で書き手の記事執筆時の現在において未知の事柄を推測することになり、テンス的意味の上で矛盾するため、体験報告のテキストでは使用しにくくなるのだろう。

以上をまとめると次のようになる。

新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様 I

両形とも書き手の記事執筆時の現在を基準軸とする、絶対的な時間的位置付けを表す。基本的に非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かで、テンス的意味の対立を示す。そのため、テンス交替ができない。

4.2 随筆

次の、波比売（はひめ）神社を訪れた書き手の随筆のテキストにおける「ようだった」はどのようなあり様を示しているのだろうか。

(7) 2003年11月18日 朝刊 奈良2

波比売神社 吉野「金山」に社殿（隠れ古社寺 気まま旅）波比売（はひめ）神社

ここ数年、奈良の山を気ままに歩いてきた。そろそろ面白そうな目標が尽きてきた感があった。それで地名辞典をめくっていると、「吉野三山」の字句に出合った。

吉野の山といえ、だれもが思い浮かべるのは、桜の名所の吉野山。関係があるのだろうと思ったが違った。下市町の栃原岳（標高530メートル）、西吉野村の銀峯山（612メートル）、両町村にまたがる櫃ヶ岳（781メートル）のことだとある。なぜ「吉野三山」なのか、興味がわいて山仲間を誘った。

マイカーで吉野に向かう。（中略）

細い道が山中に続いている。栃原岳はハイキングコースの一面に①組み込まれているようだった ①'組み込まれているようだ。「歩こうか。そのつもりで来たのだし」と仲間はいう。駐車できる広い場所もある。道の先がどうなっているのか、わからず不安にもなった。しかし、地図には山頂付近に電波塔のマークがある。「行けるところまで行こう」

心配は杞憂（きゆう）だった。山頂近くに三つもの大きな電波塔があり、うち一基は近年②建てられたらよかった ②'建てられたらしい。工事中トラックが上っていたことが分かった。

（中略）

これまた新しい社務所を訪ねたが、人気はない。残念ながら、吉野三山のいわれを知る手がかりはなかった。がっかりしていると仲間が言った。

「見ろよ。五条付近から望むと、きっといい山なんだ。金剛、葛城、それに二上山も見える」

金剛山、葛城山は修験道に関係する山だ。三山のいわれも修験道に関係するのだろう。そう思った。その推測は当たっていたが、それを知ったのはずっと後の話。この時は、次の銀峰岳に登れば、何か分かるかもしれないと栃原岳を下った。 (高橋徹)

書き手が波比売（はひめ）神社を訪れたのは、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、それより過去の出来事であることが、(7)の最後、太線部で示した、「それを知ったのはずっと後の話。この時は」という箇所から分かる。書き手が波比売（はひめ）神社を訪れたその時点ではなく、書き手の記事執筆時の現在でなければ、書き手が波比売（はひめ）神社を訪れたその当時の推測である「その推測は当たっていた」、そして、それを「知ったのはずっと後の話」であるとは言えない。

しかし、四角で囲んだ(7)の①の「ようだった」と(7)の②の「らしかった」が現れる箇所は、書き手の記事執筆時の現在の時点において、波比売（はひめ）神社を訪れた時のことを随筆として記していない。書き手として、記事執筆時の現在に留まらず、それよりも過去に体験した出来事である、波比売（はひめ）神社を訪れる、その体験者となっている。この四角で囲んだ箇所では、書き手が現実の記事執筆時の現在から離れ、体験者として過去の出来事の世界に、まるで物語の特定の作中人物のように現れて、波比売（はひめ）神社を訪れた際の出来事を語っていると見えよう。

このように、体験者にとっての出来事時を基準軸として、体験者がかかわる出来事や体験者自身の心情が語られる場合には、非過去か過去かといった絶対的位置付けは必要がなくなり、モダリティの非過去形と過去形は、工藤（1995）が言う「描出話法」として、視点の相違として対立する。非過去形であれば出来事の体験者の「知覚体験性＝内的視点」として、体験者の意識の直接的再現が行われる。その一方、過去形では、体験者の「意識の対象化＝外的視点化」が起こり、体験者の意識の直接的再現ではなく、書き手による過去の出来事の提示となる。

四角で囲んだ箇所では、書き手が記事執筆時の現在から離れ、波比売（はひめ）神社を訪れる体験者となっている。そして、2. の表1のⅡの意味用法を持つ、この(7)の①の「ようだった」では、体験者となった書き手の、波比売（はひめ）神社を訪問する出来事時において、「細い道が山中に続いている」ことを知覚で捉え、それに基づいて判断した様子が述べられている。また、2. の表1のⅢの意味用法を持つ、(7)の②の「らしかった」では、体験者となった書き手の、波比売（はひめ）神社を訪問する出来事時において、「山頂近くに三つもの大きな電波

塔」があることや「工事用トラックが上っていた」ことを証拠として推測を加えた結果、判断される事態が述べられている。

そのため、(7)の①の「ようだった」と②の「らしかった」とも、書き手にとっての記事執筆時の現在を基準軸として、それより過去の時点であるというテンスの意味を持っていない。テンスの意味の対立がないため、①の「ようだった」は「ようだ」に、②の「らしかった」は「らしい」に置き換えられる。また、四角で囲んだ箇所の点線部もすべて、体験者となった書き手にとっての、波比売（はひめ）神社を訪問する出来事時における継起性や同時性を表している。以上をまとめると次のようになる。

新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様Ⅱ

両形は、書き手が、書き手自身の過去の出来事の体験者となった場合、体験者にとっての出来事時を基準軸とするため、絶対的な時間的位置付けを表さない。そのため、非過去形と過去形とは視点の相違として対立しており、非過去形であれば体験者の意識の直接的再現が行われるが、過去形では、体験者の意識の対象化が起こる。非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かのテンスの意味の対立を示さない。したがって、テンス交替ができる。

ところで、次の、作家保坂和志の、近所に暮らす子猫たちの様子を描いた随筆のテキストに現れる「らしかった」はどのようなあり様を示しているのだろうか。

(8) 2002年9月5日 夕刊 らうんじ1

「危険な夏」越えた3匹 保坂和志（猫の散歩道）

今年の夏はとにかく暑かった。外で仕事をしている友人は「危険な暑さ」と言った。そんな暑さの中、近所の三匹の子猫たちは、日陰でボロ雑巾（ぞうきん）のようになっていた。

（中略）

飼い主はいるのだが、子猫たちはいつも勝手気ままに外で寝ていて、この「危険な暑さ」を無事に越せるのだろうか、私はけっこう本気で心配していた。「冬を越せるか」と心配するならともかく、「夏を越せるか」なんて、普通じゃない。

それでもなんとか最悪の暑さは終わり、子猫たちもチョロチョロ動き回っていることの方が多くなった。ボロ雑巾みたくても子猫は可愛い、チョロチョロ動く姿はもっと可愛い。ゆうべは、鳴き始めた秋の虫に子猫も耳を澄まして、生涯最初の①狩りをしようとしているらしかった。（作家）

(8)は、書き手である保坂和志の、記事執筆時の現在を基準軸として、それより過去の「近所の三匹の子猫たち」について記した随筆のテキストである。それは、(8)の太線部から分かる。太線部では、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、「今年の夏はとにかく暑かった」「最悪の夏は終わり」「ゆうべ」という過去の時点が表されている。そして、(8)の①の「らしかった」は、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、それより過去の時点にあたる「ゆうべ」の出来事を述べる文に現れている。この(8)の①の「らしかった」は、先の(7)の②の「らしかった」とは異なり、書き手が過去の出来事の体験者となって、その出来事時現在を基準軸として述べられていない。

はたして、この(8)の①の「らしかった」はどのような特徴を持つのか。まず、次の①'のように、非過去形「らしい」に置き換えて考えてみたい。

①' ゆうべは、鳴き始めた秋の虫に子猫も耳を澄まして、生涯最初の*狩りをしようとしているらしい。

この①'のように、「らしい」に置き換えると非文になってしまう。書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、それよりも過去の時点を表す「ゆうべ」と、書き手の記事執筆時の現在において未知の事柄を推測するというのが基本的な意味用法である、非過去形「らしい」との共起が、テンスの意味の上で矛盾しているからである。

しかし、次の①"のように、(8)の①の「らしかった」は、過去の時点に知覚で捉えた様子を述べる意味を持つ、過去形「ようだった」に置き換えられるのである。

①" ゆうべは、鳴き始めた秋の虫に子猫も耳を澄まして、生涯最初の狩りをしようとしているようだった。

ここから、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、それよりも過去のテンスの意味を持つ「らしかった」は、非過去形「らしい」の基本的な意味用法である未知の事柄の推測の意味を持たず、過去の時点に知覚で捉えた様子を述べる意味を持つと考えられる。

(8)の①の「らしかった」は、2. の表1のⅡの意味用法を持ち、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として、それよりも過去の「ゆうべ」の時点において、書き手が知覚で捉えたことに基づいて判断した「子猫」の様子を、「鳴き始めた秋の虫」に耳を澄まして、「生涯最初の狩りをしようとしている」と述べていると考える。過去の時点で捉えたことに基づいて判断した様子を述べる場合は、「らしい」の過去形ではなく、2. の表1で示した通り、Ⅱの意味用法を持つ「ようだ」の過去形が本来的には使用される。しかし、書き手の記事執筆時の現在を基準軸とした場合、「ようだ」に対して「ようだった」が使用されることから、「ようだ」と同じく認識的モダリティであり、かつ、意味の分布に重なり合いが生じる「らしい」に対しても、書き手の記事執筆時の現在を基準軸とした過去のテンスの意味を表す「らしかった」が使用されてよいという類推から、「らしかった」が使用されているのではないか⁽³⁾。つまり、書き手の

記事執筆時の現在を基準軸として、それより過去の時点において知覚で捉えた何らかの様子を述べる、本来的「ようだった」に引っ張られて、「らしかった」が現れたと考えられないだろうか。

5. 新聞Ⅱのテキストにおける「ようだった」「らしかった」

つづいて、書き手の非体験的な過去の歴史的事実を提示する新聞のⅡのテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様を見ていきたい。分析にあたり、ここでは、3. で示した新聞Ⅰの具体的なテキストである、事件や人物についての記事の中でも、証言の引用部分とそれ以外の部分と、それぞれに現れる「ようだった」「らしかった」のあり様を見ていきたい。

5.1 事件や人物についての証言の引用部分

新聞Ⅱのテキストの中でも、この事件や人物についての証言の引用部分では、「ようだった」の使用が非常に多く見られた。そして、「らしかった」の使用にはある特徴が見られた。

次の(9)は、関係者の証言をもとに、プラズマテレビの開発関係者にまつわる過去の事実が書き手によって記されている。

(9) 2006年11月13日 夕刊 1 総合

(ニッポン人脈記) ものづくりの力：1 薄型テレビをやミ研究

(前略)

篠田が常に気にかけていたのが、カラー液晶の動向だった。86年、シャープが3型の小型液晶テレビを発表し、プラズマに先んじた。「やられた」と思った。

実はそのとき、シャープの開発リーダーだった船田文明(ふなだふみあき)

(59)は「七転八倒の苦しみ」を味わっていた。工場で不良品が山を築いていた。良品は1割もない。「今日はマグロ2本にカツオ20本」と技術者たち。「マグロが完全品、カツオは使いものになる良品。ふたをあけてみないとわからない。①まるで漁業のようだった」①*まるで漁業のようだ」と、いまディスプレイ技術開発本部長の水嶋繁光(みずしましげあき)(51)は振り返る。

(後略)

この(9)の①の「ようだった」は、プラズマテレビの開発関係者「水嶋繁光」の証言の引用部分に現れている。2. の表1のⅠの意味用法を持つ、この(9)の①の「ようだった」では、プラズマテレビの開発関係者「水嶋繁光」が証言する「いま」を基準軸として、それより過去の、カラー液晶開発当時を「振り返って」、開発の日々を「まるで漁業のようだった」と喩えている。そのため、この(9)の①の「ようだった」は過去のテンス的意味を持っていると言えよう。この(9)の①の「ようだった」を「ようだ」に置き換えた場合、非過去のテンス的意味を持って、

プラズマテレビの開発関係者「水嶋繁光」の証言の「いま」現在の時点で、「水嶋繁光」が知覚で捉えた様子を喩えていることになってしまうため、置き換えられない。

そして、次の(10)は、元首相三木武夫の妻「三木睦子」自身の証言をもとに、書き手が「三木睦子」にまつわる事実や過去の出来事が書き手によって記されている。その中で、「三木睦子」の証言の引用部分に「らしかった」が現れる。

(10) 2006年3月8日 夕刊 1 総合

(ニッポン人脈記) 市民と非戦：13 政治は連帯を作れるか 夫と兄への思いを胸に

(前略)

三木武夫は、東大教授だった丸山真男と親しかった。東京・吉祥寺で歩いて3、4分の近くに住んでいたことがあって、武夫は聞き好き、丸山は話し好き、お互いの家を行き来し、折々ワインを飲みながら話し込んでいた。

睦子は言う。「ついこの間も、夫人のゆかり（り）さんから手紙が来ましたのよ。子どもが同じ幼稚園に行っていましたね。60年安保のとき、丸山先生はデモの帰りによくいらした。三木は反対の立場なのに話はよく①合うらしかった {①' *合うらしい} ですよ。「議会の子」三木も条約の強行採決には不満で、首相岸信介(きしのぶすけ)の滞在先の箱根まで意見書を持って会いに行った。そんな一部始終を、睦子はそばで見続けた。

(後略)

この(10)の①の「らしかった」はどのような特徴を持つのだろうか。この「らしかった」は(10)の①'のように「らしい」に置き換えると非文になってしまう。それは、元首相三木武夫の妻である「三木睦子」の証言時の現在を基準軸として、それより過去の「60年安保のとき」と、未知の事柄を推測する非過去形「らしい」の持つ現在のテンス的意味とが共起すると、テンス的意味の上で矛盾するためである。しかし、(10)の①の「らしかった」は、次の①"のように、過去の時点に知覚で捉えた様子を述べる「ようだった」に置き換えられる。すると、「三木睦子」の証言時の現在を基準軸として、それより過去の「60年安保のとき」に、「三木睦子」が知覚で捉えたことに基づいて、「三木武夫」の、「丸山先生」と「話はよく合う」様子が、「ようだった」で述べられていると考えられ、その置き換えは自然である。

①" 60年安保のとき、丸山先生はデモの帰りによくいらした。三木は反対の立場なのに話はよく合うようでしたよ。

この(10)の①の「らしかった」は、特定の関係者の、過去の事実や出来事時に知覚で捉えた様子を表す意味を持つ。この、過去の時点において知覚で捉えた様子を表す「らしかった」は、4.2で指摘した、「ようだった」からの類推による「らしかった」の用法と同じであると考えられる。

ここまでをまとめると次のようになる。

新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様Ⅲ

両形は、特定の関係者の証言時の現在を基準軸とする、絶対的な時間的位置付けを表す。非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かで、テンスの意味の対立を示す。そのため、テンス交替ができない。

5.2 事件や人物についての証言の引用以外の部分

新聞Ⅱのテキストの中でも、事件や人物についての証言の引用以外の部分では、「ようだった」の使用は非常に少なく、「らしかった」の使用の方が多く見られた。そこでまず、「らしかった」のあり様について見たい。

次の(1)では、「情報処理会社の営業課長Dさん」の証言をもとに、「Dさん」にまつわる過去の出来事が、書き手（田中和彦）によって記されている。そこに、2. の表1のⅣの意味用法を持つ、「らしかった」が現れている。

(1) 2003年5月31日 朝刊 be週末b4

部下はシングルマザー 田中和彦（複職時代）

情報処理会社の営業課長Dさん（37）はある日、部下の30歳代の女性に呼び出された。応接室で向き合うと、意を決したように口を開いた。

「子どもを産むつもりです」

（中略）

「で……」と、尋ねかけると、「それ以上はプライバシーの問題なので」と、はねつけられた。とにかく、産休の手続きを①進めて欲しいということらしかった {①'進めて欲しいということらしい}。

（中略）

その日は結局、人事には報告しなかった。家へ帰り、会計事務所に勤める妻に相談した。「未婚だって、制度的には特別なケースじゃないと思うわよ」。あっさり言われた。

翌日、人事部長に報告しても、やはり驚きは共有してもらえなかった。「だってシングルマザーはうちの会社にも何人かいるよ」。離婚して子どもを育てながら働く女性が念頭に②あるらしかった {②'あるらしい}。そもそも、人事も最近では考え方を変えているという。結婚情報も全社には流してない。発表を望む人ばかりではないからだ。言われてみれば、社内報から「結婚おめで

とう」のコーナーが消えていた。

(中略)

「俺（おれ）って古い人間なのかな」

結局、彼女は完璧（かんぺき）な引き継ぎ書をつくり、何の支障もなく、出産休暇に入った。（ディレクターズマガジン編集長）

(11)では、冒頭から最後まで、書き手が、書き手の記事執筆時の現在に留まらず、書き手が関係者である「Dさん」になって、つまり、書き手が特定の関係者となって、関係者が体験した過去の出来事を述べている。さらに、「Dさん」が体験した過去の出来事とは、「ある日」の出来事であり、その時間は、書き手の記事執筆時の現在を基準軸として特定できる時間ではなく、不特定なものである。このように、特定の関係者にとっての出来事時を基準軸として、特定の関係者がかかわる出来事や特定の関係者の心情が語られる場合がある。その場合、非過去か過去かといった絶対的位置付けは必要がなくなり、モダリティの非過去形と過去形とは「描出話法」として、視点の相違として対立する。テンスの意味の対立がないため、(11)の①と②の「らしかった」は「らしい」に置き換えられる。

では、「ようだった」ではどうだろうか。次の(12)は、夫が病気で倒れてしまった「真弓さん」の証言をもとに、「真弓さん」にまつわる過去の出来事が書き手によって記されている。

(12) 2006年10月12日 朝刊 生活 1

(患者を生きる：165) 脳卒中 夫が倒れて：2 妻見て号泣、意識が戻った
(前略)

1週間後、真弓さんは仕事を再開した。時給770円、フルタイムでのパート事務。いまや一家の生計が、自分の肩にかかろうとしている。長期欠勤はできなかった。

職場では同僚たちが次々と声をかけてくれた。「大変だったね」「無理しないで」。涙腺が緩んだが、パソコンの画面に集中した。〈ちゃんと眠って、しっかり食べて、身支度も整えなきゃ。〉背筋が①伸びるようだった {①' 伸びるようだ}。

入院から2週間後の土曜日。真弓さんは、一般病棟に移った夫を久々にゆっくり見舞った。その顔を見た途端、利紀さんは顔中をゆがませ、声を漏らした。「うっ……」

(後略)

この2. の表1のⅡの意味用法を持つ(12)の①の「ようだった」は、捉え方によって意見が分かれるだろう。ここでは、書き手が特定の関係者である「真弓さん」となって、「真弓さん」にとっての出来事時である、「パソコンの画面に集中」して「身支度も整えなきゃ」と考えて

いた時を基準軸として、知覚で捉えた様子を「背筋が伸びる」と述べているため、(12)の①の「ようだ」に置き換えられると考える⁽⁴⁾。

以上をまとめると次のようになる。

新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様Ⅳ

両形は、書き手が特定の関係者となった場合、特定の関係者にとっての出来事時を基準軸とするため、絶対的な時間的位置付けを表さない。そのため、非過去形と過去形とは視点の相違として対立しており、非過去形であれば特定の関係者の意識の直接的再現がされるが、過去形では、特定の関係者の意識の対象化が起こる。非過去形と過去形とは、非過去の意味か過去の意味かのテンス的意味の対立をしない。したがって、テンス交替ができる。

6. まとめ

以上の考察から、新聞のテキストに現れる現代日本語の認識的モダリティ「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様が、新聞のテキストの中でもそれぞれ具体的なテキストごとに異なることを明らかにした。それらを図に示したのが表2である。そのテンス交替のあり様は、小野澤（2008）で指摘した会話のテキストならびに小説のテキストと同じく、発話主体および発話時の基準軸と大きく関係していることが指摘できる。

表2 「ようだ」「らしい」のテンス交替のあり様とテキストとの関係

	テキスト	発話主体	発話時の基準軸	「ようだ」「らしい」のテンス交替	テンス的意味の対立
①	証言の引用	過去の事件や出来事の特定の関係者	特定の関係者にとっての証言時現在	不可	あり
②	体験報告	過去の出来事を体験した書き手	書き手にとっての執筆時現在		
③	事件人物記	書き手が特定の関係者となっている場合	特定の関係者にとっての出来事時	可	なし
④	随筆	書き手が過去の出来事の体験者となっている場合	体験者にとっての出来事時		

表2の①と②のテキストでは、非過去か過去かでテンス的意味の対立があるため、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができない。その場合、①と②のテキストでは、過去の出来事を自ら体験した発話主体にとっての発話時「現在」が基準軸となり、その現在かそれともそれより未来か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じるという類似点が見られる。これは会話文のテキストに通じる特徴である。しかし表2の③と④のテキストでは、非過去か過去かでテンス

的意味の対立がないため、「ようだ」「らしい」はテンス交替ができる。その場合、③と④のテキストでは、発話主体が、虚構の物語の特定の作中人物のようになり、そして、過去の「出来事時」が発話時の基準軸となる。そのため、現在か過去かという絶対的な時間的位置付けが生じない。これは、小説の地の文のテキストに通じる特徴である。このように見てくると、表2の③と④のテキストは、①と②のテキストと発話主体と発話時の基準軸に相違点があり、結果、新聞のテキスト間の特徴には隔たりがあるといえる。

今後は、本稿における枠組みをさらに精緻なものにするとともに、「ようだ」と「らしい」の意味用法や特徴について、過去形という観点から再考したい。また、過去形を持つ他のモダリティ形式の中でもテンス交替が不可となるものについて分析を行っていきたい。

〔注〕

- ⁽¹⁾小野澤（2008）の「ようだ」「らしい」の枠組みは、推測を述べる「ようだ」の扱いといった検討すべき点があるが、それは今後の課題とし、ここでは小野澤（2008）で用いた枠組みと同じもので、新聞のテキストにおける「ようだった」「らしかった」のあり様を探ることとした。
- ⁽²⁾工藤（1995）の「体験的ノンフィクション」「非体験的ノンフィクション」の枠組みを参考にした。
- ⁽³⁾「ようだった」からの類推としての「らしかった」というこの考察は、東京学芸大学北澤尚教授からのご助言を踏まえている。現段階では用例数が十分とは言えず、今後、裏付けに足る用例数をもとに分析を続けたい。
- ⁽⁴⁾「背筋が伸びるようだったと真弓さんは振り返る」というように、特定の関係者である「真弓さん」の証言時の現在を基準軸として、それよりも過去の出来事時である、「パソコンの画面に集中」して「身支度も整えなきゃ」と考えていた過去の時点に知覚で捉えた様子を表していると捉えると、「ようだ」に置き換えられない。今回の用例調査で、新聞Ⅱのテキストである証言の引用部分以外に現れる「ようだった」の用例数が非常に少なかった理由とあわせて、今後、そのあり様を明らかにしたい。

〔参考文献〕

- 小野澤佳恵（2008）「小説の会話文と地の文に見られる『ようだ』『らしい』のテンス交替—発話主体と発話時の視点から—」『国際交流基金日本語教育紀要第4号』pp.13-25、国際交流基金
- 菊地康人（2000）『「ようだ」と「らしい」—「そうだ」「だろう」との比較も含めて—』『国語学』第51巻1号pp.46-60、日本語学会
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4第8部モダリティ』くろしお出版
- 宮崎和人（2002）「序章」「第4章 認識のモダリティ」『新日本語文法選書4モダリティ』くろしお出版

〔用例出典〕

朝日新聞オンライン記事データベース『聞蔵（きくぞう）』